

大学における第二外国語教育の意義と これからの展開



境 一三
慶應義塾大学経済
学部教授

中尾 浩
愛知大学名古屋教
学部長、法学部教
授

多様化が進む第二外国語教育の
意義やこれからの展開

三浦 グローバル化によって、英語によるコミュニケーションスキルの重要性が増していますが、各大学では、母国語と英語以外のいわゆる三つ目の言語として、第二外国語教育が伝統的に行われてきました。本誌でも、第326号（2009年5月号）で「変わる第二外国語事情」と題する小特集を組みましたが、8年を経た現在では、第二外国語教育の位置付けや開講科目数の多寡、必修化の有無など、各大学・学部の取り組みはますます多様になっているといえるのではないのでしょうか。

学生が学びたい言語は、時代によって変化します。また、私大連盟による「国際教



司会

三浦 英俊

南山大学理工学部
教授、総合政策セ
ンター広報・情報
部委員 (大学時
報)

吉本 一

東海大学国際教育
センター教授

寺家村 博

拓殖大学言語文化
研究所所長、政経
学部教授

愛知大学の「英語プラスワン」と
学部ごとに状況が異なる慶應義塾大学

育・交流調査2015」でも、加盟大学における学生の海外派遣数は増加傾向にあります。派遣先の国は多岐にわたり、英語以外の言語圏へ留学する学生のサポートも求められます。一方、多くの大学では地域や一般向けの公開講座として語学学習プログラムを提供しています。

本日は、第二外国語教育の多様な取り組みを紹介いただくとともに、学生や社会のニーズに基づいた第二外国語教育のこれからの展開や、複数の言語を習得する意義などについて考えていきたいと思います。

中尾 愛知大学では、7学部のうち、現代中国学部を除いた6学部で第二外国語が必修になっています。本学の前身ともいえるのは1901年に中国・上海に設置された東亜同文書院（後に大学）であり、伝統的に中国語教育に力を入れてきました。現代中国学部は専門教育課程で中国語を必修として集中的に学ぶため、これが第二外国語の代わりになっています。従って、全学部

で2つの言語を学べるようになっていきます。

私が先輩の教員から20年以上にわたって言われ続けているのは、外国語に関しては愛知大学では「英語プラスワン」が基本方針であるということです。英語の重要性を認めた上で、英語だけ教えていけばいいわけではないということ、英語の教員も第二外国語の教員も自覚し、機会があることに学生にも伝えるようにしています。

カリキュラム上は、選択外国語として第三、第四外国語を履修しても単位認定しており、「英語プラスワン」というモットーをそういったところでも生かしています。

境 慶應義塾大学は規模が大きく、一概に「これが本学の外国語教育だ」といえない面があります。第二外国語の教員は全て学部配属になっており、基本的には所属する学部の外国語教育を担当する仕組みです。

本学には10の学部があり、各学部はそれぞれの学則に従って第二外国語教育を展開している、状況が異なります。私が所属する経済学部では、英語以外の第二外国語が選択必修になっており、ドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語から選択で

きます。3、4年次でも第二外国語を継続して学ぶことができます。

三浦 学部ごとに教員がいらっしゃるということは、第二外国語の授業でも学部の専門分野に関連した内容を扱ったりするのでしょうか。

境 そこまでいけばいいのですが、初歩の外国語を教える場合、内容はほぼ共通です。第二外国語というのは、あくまでも基礎の部分を見せています。昔と違って3、4年次の専門教育やゼミで外国語の専門書を読み込むというところまで行くのは、なかなか難しいものがあります。そういう意味では直結しているとはいいたいのですが、学部によっては、例えば法学部のドイツ語の教員の一部には、ドイツ語がゼロの段階から社会科学系の学生に向けた内容で教えていると明言している方もいらっしゃいます。しかし、それが多くの教員に共有されているわけではありません。

第二外国語は拓殖大学DNAの一部 多様な言語を学べる東海大学

寺家村 拓殖大学の前身は1900年に桂

太郎が設立した台湾協会学校であり、台湾の発展に寄与・貢献する人材の育成が大きな目的でした。そのためには、日本語だけでなく現地の言葉で、台湾の人々と同じ目線で話すことが大切なこととされ、こうしたことから第二外国語は本学のDNAの一部であると思っています。

本学は5学部を擁しますが、工学部だけは英語のみが必修で、他の4学部は最低1、2年次の週2コマが選択必修の第二外国語になっています。私が所属する政経学部では、第二外国語はスペイン語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、インド・パキスタン語、アラビア語、ロシア語、インドネシア・マレーシア語、ブラジル・ポルトガル語の10言語から選択できます。

3、4年次では、選択科目として各言語とも演習科目を用意しており、慶應義塾大学同様に第二外国語を4年間学べるシステムが整っています。

吉本 私が所属する東海大学の国際教育センターは、英語教育を担当する第一類と第二外国語教育を担当する第二類という部署から成る外国語教育センターと、旧・国際

教育センターが2016年度の組織改編で統合して生まれました。

5部門に分かれており、英語教育部門と私がある国際言語教育部門、留学生支援教育部門、国際教育部門、そして日本語別科があります。国際言語教育部門は英語以外の9言語を担当しており、その中で専任教員がいるのは中国語、フランス語、ドイツ語、ロシア語（韓国語）、ロシア語、スペイン語の6言語です。イタリア語とタイ語、インドネシア語は非常勤の教員だけで対応しています。また、国際教育部門は、全ての授業を英語で行うという教育を担当しています。

先ほどからお話をうかがっていて、ある意味でうらやましく感じたのですが、本学にはいろいろな言語を学べる環境がありますが、必修は少なくなっています。ほとんどの学科で選択必修であったものが次第に廃止された結果、現在も選択必修が残っているのは観光学部観光学科であり、英語が必修で第二外国語が選択必修です。また、西洋史学科では西洋の言語、東洋史学科では中国語や韓国語といった東洋の言語

から1つを選択します。

以前は、国際学科などで英語ともう一言語といわれていましたが、いまは英語重視という考え方になりつつあります。

三浦 いつ頃から、そのように変わってきたのでしょうか。

吉本 赴任して約10年になりますが、その間に少しずつ変わってきました。国際学科も2年前までは選択必修がありましたし、それ以外の学科でも減っている状況です。

英語重視の風潮の中で

第二外国語の履修は少なくなっている

三浦 吉本先生から、第二外国語が必修ではなくなってきたというお話があり、これは社会の流れと関係しているように感じましたが、なぜなのでしょう。例えば、ほかに学ばなければいけないものが増えたとか、もつと英語のほうに力を入れなくてはいけないといった理由があるのでしょうか。

境 一般論としていえば、「中学・高校で6年間も英語を学んでも使えないので、さらに他の言語をやっても意味がない」、もしくは「他の言語に労力を割くくらいなら、もつ

と英語に力を入れて、少なくとも英語だけは使えるようにしたほうがいい」という意見が、日本の社会全体に根強くあると思います。経済界では、経団連や経済同友会のレポートもこうした見方が基調になっています。それが文部科学省の施策に影響を与えている面もあるのではないのでしょうか。

また、高校ではドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、ロシア語などいろいろな選択肢があるのですが、学習指導要領には「英語に準ずる」と1行あるだけです。

三浦 そうなんですか。

境 大学は学習指導要領がないので、各大学あるいは学部ごとの教育方針に任ざられています。高校までの学習指導要領の影響が通奏低音のように影響していると感じています。

三浦 英語重視の流れについて、他の先生方はどのようにお考えでしょうか。

吉本 本学でも、英語が十分にできないのに、さらにプラスして学ぶのは難しいのではないかと、英語だけでもきちんとやっておいたらどうかという雰囲気があります。

ただ、第二外国語を選択する学生も決し



中尾浩氏

て少なくありません。英語を学ぶ学生の数は毎学期約1万数千名だそうです。それに對して、少しずつ変動はありますが、本学で開設している6言語の中では、中国語、スペイン語、韓国語の順に履修者数が多く、千〜千数百名にのぼります。次に、ドイツ語、フランス語、ロシア語と続いて、それぞれ千名をちよつと下回ります。選択必修ではないのに、多くの数の学生が履修していると感じます。

三浦 中国語が一番多くて、スペイン語、韓国語と続くわけですか。かつてはドイツ語やフランス語を履修する学生が多かったように思いますが、最近は学生の志向も変わってきたのでしょうか。



境一三氏

吉本 はい。おそらく、本学だけの傾向ではないと思います。

寺家村 ただ、波はあるようです。拓殖大学では少し前までは中国語が多かったのですが、その後フランス語やドイツ語が盛り返してきました。

新入生には各言語の説明や魅力を伝えますが、実際に履修登録が終わって見ないと、どの言語が多いか少ないかは分かりません。ただし、アラビア語やロシア語が急に増えるということはなく、メジャー5言語といわれるドイツ語、フランス語、スペイン語、韓国語、中国語の中で差があるという感じ

スペイン語、フランス語の人氣が高く
ドイツ語の履修は減少傾向

境 慶應義塾大学では、学部によって事情が相当違います。経済学部や商学部では、この15年くらい、中国語が最も多かつたものの、日中関係があまりよくないことなどの影響を受けて、ここ数年1000〜2000名単位で履修者が減っています。

それに対して、スペイン語はずつと高止まりしています。私が所属する経済学部では、フランス語の履修者はほぼコンスタントで、ドイツ語はここ20年くらい長期低落傾向にあります。私が1997年に日吉キャンパスに赴任した頃は、経済学部ではドイツ語が15クラスで最大勢力でしたが、いまは最小の5クラスです。代わって、スペイン語15クラスが最大ですね。こうした浮き沈みが、相当大きいです。

中尾 愛知大学もほぼ同じ状況で、中国語の履修希望者が多いものの、最近ではフランス語の人氣も高く、フランス語の履修希望者が中国語に匹敵する年もあります。ドイツ語と韓国・朝鮮語は減少傾向でしたが、

ここ数年は希望者が増えつつあります。

ロシア語とタイ語は、第2希望まで含めると1クラス分の希望者がいます。タイ語は日本では地味な印象がありますが、日本経済はタイとの関係が非常に深いため、タイ語を学びたいと話す意識の高い学生もいます。ロシア語は発音も文法も難しいのですが、第二外国語でフランス語を学んだあとに、第三外国語としてロシア語を履修した学生もいます。

**言語の学習を通して
その国に対する理解が深まる**



寺家村 博氏

境 先ほど、ドイツ語が長期低落傾向と申しましたが、理系の学部では根強い人気がある

あります。もともと、全国の大学の理系学部ではドイツ語しか選択肢がないところが多く、そこにフランス語を増やしたという事情があります。

ロシア語は全学的に履修者が少ないものの、非常に熱心な教員や学生が多く、学部横断的にいろいろなイベントを催して盛り上がっています。また、理工学部でロシア語を履修する学生には、「宇宙へ行くならロシア語が必修」と言っています。いま、宇宙へ人間を送り出しているのは主に米国とロシアなので、宇宙飛行士は全員、英語とロシア語が必須で、実際にできます。



吉本 一氏

三浦 それはいいお話ですね。
境 ロシア語の学習を通して、かつてのソ

連にはたいへんな科学技術の蓄積があったことが次第に分かってくると、さらに関心が深まるといったこともあるようです。韓国語は本学でも一時期、非常に増えました。最近では横ばいかやや減り気味という感じです。

三浦 中国語の履修者が多いというのは、地理的に近いということもあって理解できますが、スペイン語の人気の高いのはどういった理由からでしょうか。

寺家村 学生に聞いてみると、発音が比較的容易であったり、サッカーが強い国が多い、あとは中南米諸国をカバーしているのビジネス面の汎用性が高いといった点を挙げる人が多いようです。



三浦 英俊氏

境 私はドイツ語の最初の授業でクイズをやりませんが、グループ対抗でドイツ人の名前を挙げさせると、途中からサツカー選手ばかりになってしまいます。サツカーが入り口になってドイツ語を選択したという学生が、毎年ある程度いるようです。

中学・高校段階で、多様な言語に触れる機会がもつとあっていい

境 日本の大学における第二外国語教育は、かつては3、4年次の専門教育につなげる事が前提としてあったと思います。しかし、3、4年次のゼミで使うという第二外国語に対する実需要は、現在ではほぼありません。文学部などの一部の専攻では第二外国語が必須という領域はありますが、それ以外では、ゼミで英語の論文を読ませるだけで手一杯です。

かつては、大学に入ったら独仏を学び、専門教育でそれを使うという前提というか理念がありました。いまの大学教育の大衆化もしくはレベルの低下によって、そこまで学生に要求できなくなりました。こうなると、1、2年次における第二外国語に

対する実需要がなくなってしまったと言わざるを得ません。

では何を基準に選ぶかというと、経済系の学部の学生だったら、就職したら南米とビジネスをする可能性があるからスペイン語を選択するとか、中国や韓国や東南アジア諸国についても同様です。全員がそういった仕事に就くかどうかは別にして、少しでも可能性がある外国語を選ぶというのは、自然な流れではないかと思えます。

中尾 先ほど、学習指導要領のお話が出ました。私はフランス語が専門ですが、フランスでは中学校の中には第3外国語まで教えているところもあります。第1外国語として選ばれるのはほとんどが英語かドイツ語で、第2外国語としてはドイツ語、スペイン語、イタリア語が選ばれることが多いです。学校によって異なりますが、日本語、中国語、ロシア語、ヘブライ語などまで選択可能だそうです。

日本の学校が英語だけで手一杯なのはよく理解できますが、逆に英語しか触れる機会がないのは残念です。欧州だったら、国境を越えれば言語は別という状況が当たり

前で、外国語の習得に対するモチベーションが日本とは異なると思えます。そうした具体的なつながりがないところで、大学に入学してから、さあフランス語をやりましょう、ドイツ語をやりましょうと言われても、学生のほうで全然イメージができないのではないのでしょうか。中学校や高校段階で、いろいろな言語に触れる機会がもつとあっていいのではないかと思えます。

そして、言語と実人生のつながりといえますが、外国語を学ぶことが自分の人生とどのようにつながるのかというイメージづくりをできるだけ大切にしたいと思えます。

吉本 東海大学では新入生のオリエンテーションの際に、1言語につき3分くらい、PRをしますが、スペイン語はアピールがうまいという印象があります。日本語同様に「あいうえお」の5つの母音が分かれば読み書きができて話せるようになるし、世界中で英語の次に使われている。それに、とても楽しそうなんです。そうしたこともあって、スペイン語の履修者数が多いのかもしれません。中国語の履修者数は変動がありますが、スペイン語は同じくらいのレ

ベルを保っています。

本学では、ある言語を20単位取ると副専攻として認められる制度があります。さらに、最近では40単位を取得すると、特定プログラムという名称でダブルメジャーとして認められます。

三浦 外国語の授業だけで40単位ですか。

吉本 はい。

三浦 それはすごい数ですね。

吉本 この40単位を取得する学生は各言語とも10名前後、全言語を合わせると年間でも数十名はおり、かなり勉強していると思います。

第二外国語と専門科目の一体化を図るためのさまざまな試み

寺家村 英語の力は、入学段階で既に学生の間で差がついています。しかし、初習言語である第二外国語は皆同じ、ゼロからのスタートとなるので、そこでいかに学生のモチベーションをアップさせるか。私が所属している政経学部では、「地域研究への橋渡し」をキーワードの一つとしていろいろな試みを進めようとしています。

学生に話すのは、英語と自分という関係だったら直線にしかならないが、そこに第二外国語一つ入ってくると自分、英語、第二外国語という三角形の角度が生じる。この角度こそが多様性であり、政経学部の地域研究はそういうことを学ぶものである、と。語学だけではなく、多様性や地域といったことを学生に意識させ、専門科目への橋渡しという意味合いを持たせるようにしています。

三浦 拓殖大学の取り組みを、もう少しご紹介ください。

寺家村 50年以上前から、「個人研修奨学金」という制度を続けています。これは主に第二外国語を履修している2〜4年生を対象として、夏休みに3〜5週間、10以上の国や地域から選んで一人で行き、現地の語学学校で学ぶ学生に奨学金を支給するものです。こうしたプログラムできっかけづくりをねらっています。

また、「発信型グローバルスタディプログラム」をつくるために十数年前から準備を進め、第一段階として語学の公的検定の取得者を表彰する「第二外国語・日本語学修

奨励賞」を創設しました。奨励賞のために今度は共通テストや共通テキスト、習熟度別クラス編成を実施しています。この制度ができて10年くらいになりますが、毎年四、五十名程度の表彰者が出るようになったので、3年ほど前からようやく第二段階として「発信型グローバルスタディプログラム」を展開できるようになりました。

第二外国語と専門科目などを組み合わせる24単位以上取得すると、「発信型グローバルスタディプログラム」の修了証を授与します。例えば、フランス語を履修する学生であればヨーロッパ経済論やヨーロッパ政治論、またフランスは中東地域にも関連があるので中東政治論といった専門科目を組み合わせる履修してほしいということで、第二外国語と専門科目の一体化を図っています。

三浦 「発信型グローバルスタディプログラム」は、いつスタートしたのでしょうか。

寺家村 2017年の4月に4年生になる学生が、このプログラムの第一期生です。境 先ほど、第二外国語と専門教育の関係が途切れてしまっているというお話をしま

したが、寺家村先生のところで結び付ける動きがあるというのは素晴らしいことだと思えます。

寺家村 そうすることで、第二外国語の存在意義も確認でき、専門との連携も生まれます。

境 まさにそうですね。生き残りを考えた場合、専門教育とうまく融合させる試みが必要だと思えます。

**各言語ごとに、長期的に学ぶための
テーマやきっかけづくりが必要**

三浦 第二外国語と専門教育のつながりということでは、例えば人文社会系では地域研究などがありますが、他はいかがでしょう。経済や工学の分野は、英語でほとんど事足りるようになったと思います。英語以外のこの言語でなければ学べないといった専門教育とのつながりを、どのようにつくっていったらいいでしょうか。

境 ドイツ語を例にとると、例えば医師がドイツ語を使っていたというのはかなり昔の話であって、だいたい前から論文でも何でも英語しか使いません。法律学でも、日本



の法律はドイツ法を継受している側面が強いため、その根源までさかのぼって学ぶためにはドイツ語が必要でした。また、民法はフランスの影響が強かったようですが、戦後は特に米国法の影響が非常に強まったということもあって、英語重視です。

もうひとつの要因として、教員の留学先として米国が圧倒的に多くなり、その経験をも元にして授業をするため、教員も学生も世界の中心はアングロ・サクソンにあるように思い込んでしまう。これは、ある程度やむを得ないと思えます。

ただ、先ほどお話があったように地域研究が非常に盛んになっているので、近隣諸国とのつながりを考えると、アジアの諸言語も重要性を増している。寺家村先生からご紹介があった学際的な新しい試みは、まだまだ可能性があると思えます。

寺家村 ドイツ語については、政経学部で環境プログラムを開設しています。ドイツは環境先進国なので、環境政策や環境法、ドイツ研修なども組み込んでおり、定員20名のところに40名くらいの希望者が来ます。

境 おそらく、ドイツ語関係でいま一番人気があるテーマが「環境」です。旧来型の独文学科にも、文学には興味がないがドイツの環境を勉強したいといって卒論を書く学生が、20年くらい前からいるようです。学生がドイツに研修に行つて、パークアンドライドの実態や風力発電などを実際に見て感激して帰ってきます。

三浦 言語ごとのテーマというか、学ばさっかけになるものが何かあればいいのですね。短期的なものではなく、長期的なものか。

中尾 日本人学生のイメージと現実に

ギャップがあることもあります。例えば最近の日本人学生にはフランスに対してなんともなくオシャレくらしいのイメージしかありません。ところが、フランスからやって来る留学生は日本のマンガが大好きです。日本人よりもよく知っていたりして、われわれが持っているフランスのイメージと全然違うため、学生は戸惑っています。自分たちよりもマンガに詳しい外国人が来るのですから驚きますよね。

そこで、フランス人の若者が日本にどういうイメージを持っているのか、留学生を授業に呼んで話してもらったりしています。互いにどんなイメージを抱いているかというのは、日本人学生の外国への関心を高める方法のひとつだと思います。

寺家村 拓殖大学は、ドイツやフランスからの留学生がほとんどいません。キャンパスでフランス語が聞こえると思ったら、フリカの仏語圏から来た留学生でした。最近はベトナムやタイからの留学生が増えてきました。それから、もちろん中国です。中国と台湾の留学生の数は、一方が増える而他方が減るという関係があるようです。

本学のキャンパスでは800人以上の留学生が学んでいるので、居ながらにして、日本人の学生も留学生もある種の心地よい緊張感を味わえる環境があると思います。

境 東海大学は、もともと社会主義圏とのつながりが非常に強いので、他の大学とは違う国からも留学生が来ているのではないのでしょうか。

吉本 最近では、あまりそうでもありません。中国からは来ていますが、ロシア圏からの留学生はほとんどいないようです。以前は毎年モスクワ大学から教員を派遣していたので、ロシア語の受講生が少なかったため、ストップしました。ロシア語の受講者数は、近年、低迷状態が続いています。いまは中国はもちろんですが、サウジアラビアなどのアラブ圏からが多いようです。

**ダブルディグリーなどの実需要があれば
学生は真剣に語学を学ぶ**

三浦 寺家村先生から留学に関するお話がありました。英語圏以外の留学に対して、各大学の取り組みをご紹介します。

しょうか。

境 かなり多岐にわたりますが、大別して全学協定による交換留学と学部独自の協定による交換留学があります。期間は1年が一般的ですが、半年のものもあります。また、短期研修もあります。最近進めているのは、ダブルディグリープログラムです。

全学協定による協定校の数は、おそらく日本でも相当多いほうだと思います。しかし、その枠が埋まらないことが多い。英語圏は希望者が非常に多いのですが、それ以外の言語圏は閑古鳥が鳴いている状況です。ドイツなどは、学校を選ばなければ、申し込めばたいはいは行けるくらいです。これは非常にもったいない話なので、非英語圏の大学へ行かせるプロモートをどうするか大きな課題です。

学部独自の枠では、埋まらないケースはあまりないようですが、全学としてみると苦戦している地域もあるというのが実情です。

ダブルディグリープログラムは、幾つかの学部で進めています。私がいる経済学部ではマスターレベルから始めて、いまは学

部レベルでも行っており、パリ政治学院やイタリア・ミラノのボッコニ大学とは既に開始しています。ドイツとは、向こうの法律の関係で時間がかかっています。理工学部では、フランスではグランゼコールが先行していますが、エコール・サントラル・インターグループとは学部レベルでかなり長期間にわたってダブルディグリープログラムを行ってきました。

このプログラムでは、経済学であれば英語が中心なので授業も英語ですが、例えばパリ政治学院へ行くのなら生活のためにフランス語が必須なので、学生は留学の準備段階からフランス語に真剣に取り組んでいます。また、ミラノのボッコニ大学と協定を結んだため、第三外国語にイタリア語を開講しました。

理工学部のマスターレベルでは、パリ国立高等鉱業学校、ドイツのアーヘン工科大学など欧州の10校とダブルディグリーを実施しており、留学希望の学生は学部のうちからその言語を継続的に勉強しています。さらに、修士課程の1年目にフランス語とドイツ語の授業を設けて、ダブルディグリー

につなげています。

このように、欧州のいろいろな大学とダブルディグリープログラムがあるため、留学希望の学生は、これこそ実需要ですから真剣になって語学を学ぶということが、ここ数年、観察してきて分かったことです。

三浦 ダブルディグリーを取得するために、どのくらい留学期間が必要でしょうか。境 プログラムや学生の入学時期によりますが、学部レベルの場合、2年もしくは2年半で、合計4年を大幅に超えることはないように組んでいます。このプログラムによって2つの学士号や2つの修士号が取れるということは、学生にとって非常に有利なので、最近ではダブルディグリープログラムがあるからこの学部を志望したという学生もみられるようになってきました。

英語で授業を受けられるから 学生を留学に送り出せるという事情

中尾 最近、欧州の幾つかの大学から本学に提携の申し出がありました。その内容は、英語で経済学を学べるといったものですが、大学そのものは非英語圏であるドイツやフ

ランスにあるのです。

境 欧州の大学には、英語で開講する授業の割合を増やせという要請も相当あるようです。しかし逆に、英語で授業を受けられるからわれわれも学生を送り出せる。私のようなドイツ語の教員からすると、本当であればドイツ語で送り出したいところですが、学部レベルなら英語でもいいと思います。まず英語がちゃんと使えて、プログラムが終了する頃にはドイツ語も何とか使えるようになっていけば、とりあえずは満足していいのではないのでしょうか。

三浦 英語の授業をどこまでできるかは、その国の学生のレベルにも左右されるのではないのでしょうか。

境 それと、その国または州などの法律に縛られる部分もあります。特にフランスはそれが厳しく、授業の英語化はなかなか難しいようです。国によって状況は異なりますが、いずれも学部レベルでは現地の言語を重視するのが当然なので、そこに英語の授業をどれくらい増やすかというのは難しい問題でしょう。

先ほどご紹介したパリ政治学院は一般大

学ではなく、グランゼコールという高位レベルの特殊な大学なので自由裁量の範囲が広く、いろいろな授業を英語化するという独自のことができるのです。交渉次第で非常に柔軟にカリキュラムを組んでもらえたため、われわれのダブルディグリープログラムもうまくいったようなところがあります。法律で厳しく規制されている一般の大学では、難しいと思います。

三浦 資料によると、東海大学では留学する学生が年間1100名と非常に多いですね。やはり英語圏が多いのでしょうか。

吉本 圧倒的に英語圏ですね。私の専門である韓国語に関しては、韓国の2つの大学と協定を結んでいます。漢陽（ハニャン）大学には、1年間の長期留学に毎年2、3名、1カ月弱の短期留学には提携枠が20名くらいあります。国民（クンミン）大学には半年の中期留学で、1学期当たり2、3名が行きますが、授業は全て英語です。韓国でも、そういう大学がだんだん増えてきています。なお、韓国語のレベルは問わないといわれていますが、実生活では韓国語が必要なので、面接試験を行っています。

ほかにも、私費で留学する学生もいます。

これ以外の言語も、ほぼ同じ状況です。大学全体では、やはり英語がメインです。

寺家村 本学も全学的な留学制度と各学部ごとの留学制度があつて、半年〜1年の長期留学は全学的に、1〜2カ月の短期留学は各学部が担当しています。英語圏の人口が高く、例えばアラビア語圏には数年に1人というように、非常にもつたない状況です。欧米については外国語学部の学生が強い興味を持っており、その他の学部の学生には語学運用能力の観点からハードルが少し高いこともあります。

短期留学については、学部間の調整が必要になるでしょう。定員オーバーのプログラムから定員に満たないプログラムへ学生を割り振るといった連携を、これから考えていく必要もあると感じています。

**英語と第二外国語の連携が
いろいろな意味で必要になってくる**

三浦 第二外国語と英語の連携について、どのようにお考えでしょうか。

寺家村 私は、なるべく連携させるようにして

います。なぜなら、これは個人的な意見ですが、ドイツ語と英語は同じ西ゲルマンの言語なので、英語の基礎知識を活用したほうが、学習は圧倒的に有利になると思うからです。

私のドイツ語の授業では、英語もかなり扱います。言語史的な話題では、ゲルマンの歴史をたどらざるを得ませんので。また、英語の中のフランス語的要素、すなわちノルマンコンクエスト以降のフランス語彙の流入や文法的な影響関係といった言語学的话题も、1年次のドイツ語の授業ではかなり紹介しています。

さらに、ゲルマンのもっと古い歴史をたどって、どこで英語やドイツ語、オランダ語に分かれていったのか。それらを考え合わせるという英語が理解しやすくなるから、英語をもっと使えるようになりたかったらフランス語やドイツ語をやりなさいと、学生に勧めています。ただし、これは学生が英語をある程度できるという前提ですが。**寺家村** 以前、英語と第二外国語それぞれの成績上位者を調べて、相関関係があるかどうか検討したのですが、それほど密接な

関係がないという結論でした。ただ、これから英語と第二外国語の連携がいろいろな意味で必要になってくるので、そうした制度を構築していかなくてはいけないとも考えています。

境 寺家村先生がおっしゃったように、ターゲットグループがどういう特性を持っているかを見極めながら、それに応じてどのように授業を運営するかが重要です。幸い、本学の学生は英語がそこそこできるので、英語の基礎知識をなるべく活用するようになっています。

英語でフランス語を教える ドイツ語でドイツ語を教える

中尾 愛知大学では、たまたまこの春に招聘したネイティブの教員が、英語で外国語を教えることを実践してきた方なのです。英国に留学経験があり、NGOの活動で南アフリカやニューヨークにいたこともあったそうです。日本の他の大学ですつと英語で外国語を教えており、本学でも同じことをやりたいとのことでした。

彼はこの4月から1年生に教えています

が、英語が相当できる学部から英語が嫌いな学生が多いと思われる学部まで、取り混ぜて教えることになりました。しかし、本人は「心配するほどのことはありません。学生は意外に関心を持ってくれるものです」と話しています。

英語で外国語を教えるといった試みもこれから必要になるという話は、しばらく前からありましたが、実際にやるかどうかは大学ごとに温度差があります。今回はいいチャンスなので、実施してみることにしました。

三浦 個人的な話ですが、私は英国に1年間、留学したことがあり、息子は現地の小学校に入りました。1年生でも1学期にフランス語の授業があり、2学期はイタリア語だったと思います。ただし、私の息子は行ったばかりだったので、その時間はTAが付いて英語を勉強していました。このように、英語で他言語を教えることに関して、欧州の教員はノウハウを持っていてと思います。それが日本でどの程度通用するかは別問題かもしれませんが。

境 いまのお話のポイントは2つあって、

1つは、英国の場合は教員の母語が英語なので当然ですが、大陸側にも英語が達者な方がたくさんいるため、英語で他言語を教えられる可能性が非常に高いと思います。

もう1つは、フランス語だったら、ゼロの段階から「フランス語で」教える。ドイツ語だったらゼロの段階から「ドイツ語で」教えるということが一般化しています。私も、ドイツ語でドイツ語を教えています。雑談や詳しい説明が必要な場合は日本語に切り替えますが。そこは、厳格な一言語主義ではありません。

慶應義塾大学の経済学部の学生は1学年で1200名おりますが、そのうちの100名を対象に、2016年の9月から「PEARL (Programme in Economics for Alliances, Research and Leadership)」を開始しました。これは、4年間の全授業を英語で学ぶプログラムです。その準備段階で、第二外国語をどうするかという話になった時に、英語が基本だから第二外国語の授業も英語でやるという意見もありました。そこで私は、ターゲットランゲージで授業をする、すなわちドイツ語だったらドイツ

語で授業をすることも認めるよう要求し、実現しました。実際にドイツ語を基本として授業をやっていますが、文法的な説明など、どうしても必要な場合には英語に切り替えるというように、ある程度柔軟に運用しています。

私の知っている範囲でも、他大学で英語でドイツ語を教えている教員が何人かいらつしゃいます。それは、やはりドイツ語と英語の近さを生かそうとしているように思います。

三浦 韓国語の場合は、いかがでしょうか。

吉本 英語で韓国語や中国語を教えるクラスも必要ではないかという話が、何年前から出ています。やろうと思つたら可能な教員もいますが、学生がどれくらいついでこられるかは未知数ですね。

言語環境が近い言語を学ぶのに有効な学ぶ方法は、われわれにも有効

吉本 最近、日本に来る留学生が、韓国語や中国語などいろいろな言語を勉強しているというケースが増えています。私のクラスにも中国や韓国、モンゴル、ウイグルな

どから来た留学生がいますが、中でも優秀だったのがノルウェーからの留学生です。彼はもちろんノルウェー語が母語ですが、英語も得意で、オスロ大学では英語で日本語を学んだと言っていました。来日してからは、日本語で韓国語と中国語を同時に学ばしました。経営学が主専攻でしたが、韓国語をダブルメジャーで40単位取得し、中国語は副専攻で20単位、さらに日本語教育も副専攻で20単位取りました。卒業後はソウル大学大学院へ進み、韓国語でトルコ語を勉強したそうです。語学に関しては、非常に優秀な学生でした。



境 それは非常に興味深いお話ですね。経験的にいって、言語間距離が近い言語を学ぶのに学ぶという方法は、われわれが欧州の言語を学ぶ場合も有効な手段です。また、日本語から韓国語、モンゴル語というようにつなげていくと、相当うまくいく可能性があるような気がします。

中尾 ノルウェーで、英語で日本語を学んだというのは興味深いですね。

境 それは教材の影響があるかもしれません。ノルウェー語よりも英語やフランス語、ドイツ語で出ている教材のほうが圧倒的に多いので、それを使って学ぶほうが自然ですね。

三浦 最後に、第二外国語をこれからの大学教育の中でどう位置付けたいのか、ご意見をお聞かせください。

中尾 最近、私を感じるのには、あらゆるものが多様化しているということですね。例えば、以前だったら、外国語を勉強するというとまずは辞書を引いた。それが、カセットテープが出てきて、次いでCDになり、インターネットでいつでも外国の大学の授業をオンラインで見ることができるといっ

たように、学習手段が多様化しました。

それに加えて、学生が学ぶ目的も多様化しました。かつては、医師になるためにはドイツ語を勉強しなければならぬというように、学ぶ言語と目的がセットになっていました。しかし、今の学生にフランス語を学ぶ理由を問うといういろいろな答えが返ってきて、ここでも多様化しています。

われわれの教え方も多様化しています。従来は対面型の授業しかなかったものが、最近ではEラーニングを取り入れたり、L教室がCALL（コンピュータ支援語学学習）システムになったり。いろいろなものがどのように結びつくのか、なかなか見通しにくい時代になっていますが、多様性をいかにプラスに転化して学生の学習意欲を高めることができるかが問われていると、常々感じています。

境 大学でこれからも第二外国語教育を続けることを前提とするのであれば、やはりそこに実需要を生じさせる必要があると思います。そのためには、寺家村先生のお話のようなプログラムを積極的に展開していくとか、本学のダブルディグリープログラ

ムなどによって英語以外の言語が必要な状況をつくるのが重要だと思います。

日本全体について考えると、三浦信孝先生や古石篤子先生などがよくおっしゃっている「二重のモノリンガリズム」、すなわち、学生や生徒の頭の中には、日本語と英語しかなく、それが一体の言語能力として機能していないという点が指摘されます。

英語は勉強するものであって、その人の人格や思想を形成するような言語として内化されているかという点、必ずしもそうではない。こうした状態を何とか乗り越えなければいけないと思います。

人間はさまざまな言語文化を自分の中に取り込んで一個の人格を形成していきますが、日本語と英語もない交ぜになって、多様な場面に応じて適切なほうを使う、もしくは両言語で思想形成することが本当に行われれば、言語教育が意味のあるものになると考えています。日本語と英語にもうひとつの言語が付け加えられることによって、その個人が豊かになる、そういった機会を与えるのが第二外国語教育です。

日本では、ほとんどの高校で第二外国語

教育が行われていません。中学でも導入していません。それは人間の可能性や幅を非常に狭めていると同時に、英語中心主義の考え方が小さいうちから自然に染み込ませられている。こうした状況から何とか抜け出すことは、日本の教育全体の問題です。第二外国語教育を中等教育に導入し、その基礎の上に、大学では選択肢を用意することが重要です。

多様化する社会で、第二外国語教育の存在価値はますます高まっていく

境 大学は、これからの日本を背負って立つ人材を育てるところだと思えます。そのためには、いまの日本の社会を構成している、他の言語文化を背景とした人たちと一緒にこの町をつくるというリーダーとしての視点が必要です。いろいろな言語文化があって、そうした人々が同じ町内を形成しているという感覚をリーダーが持たなくてはなりません。そこでは英語以外の言語教育が絶対に必要になるので、なるべく早いうちから始めたほうがいい。現状はそこまですべてではないため、改善の策として、大

学でそうした観点から教育を行うことが重要だと思えます。

歴史的にみると、西洋文化の導入と日本の近代化というフェーズが幕末から続いてきて、30年くらい前からは、日本の利害や意見を外に向かつてきちんと発信できる人間を育てなければいけないといわれてきました。

2000年以降は日本のどこでも住民が多様化しており、そうした現実にはきちんと対応できる学生を育てなければいけません。複数の外国語を学ぶことによって、移住者の思いや苦勞が初めて分かる。そうした共生のための外国語が求められています。受容の外国語、発信の外国語から、いまは共生の外国語というフェーズに入っているの、第二外国語教育は続ける意味が大いにあると考えています。

英語の必要性を考えると 第二外国語の存在価値もみえてくる

寺家村 なぜ英語が必要なのかを考えると、第二外国語の存在価値もみえてくるようになります。社会全体が英語の重要性をいつ

ている中で、本学でもいろいろなプログラムを用意しています。しかし、学生全員が企業が求める英語力を身に付けて卒業するということは、現実的には難しいでしょう。そこに、第二外国語の必要性があるといえます。

例えばインドネシアでは、インドネシア語ができる日本人の募集があります。そうしたところにインドネシア語を学んだ学生が応募し、向こうで4、5年働いてくるということが実際に起こっています。

第二外国語と専門科目の橋渡しということに関して、次のステップとして例えば「30のキーワードで学ぶ韓国語」といったテキストを、専門科目の教員とわれわれが相談して易しい韓国語で執筆して二年次の韓国語の語学クラスで使うといったことも考えられます。

また、初年次教育に第二外国語を組み入れることや、本学で開講している外国語のオープンカレッジで取得した単位を学部の卒業単位の組み込むことができないかといったことも検討に値すると思います。

吉本 英語以外にもうひとつくらいはでき

たほうがいいといったように、学生の意識がかなり変わってきたと思います。それから、やはり実用的な言語や身近な言語である中国語や韓国語を学ぼうとするでしょう。しかし、保護者や企業の経営者、そして教員の側の意識はあまり変わっていないように感じます。学生が韓国語や中国語を学び、留学に行っても普通に話せるレベルになる。それに対して、やはり英語ができなくては、という感じですよ。

三浦 それはもったいないですね。

吉本 第二言語の中でも、欧州の言語とアジアの言語に対して、意識の差があるような気がします。語学だけではなく、英米圏の英語で得られるような情報は日本語でもほとんど得られるようになってきていると思います。しかし、それ以外の、例えば中国や韓国の視点というのは、日本語ではなかなか得られない部分が大いにあります。こうした面からいっても、英語以外の第二外国語の存在価値が今後もあるのではないかと思います。

三浦 本日は多岐にわたるお話をいただき、ありがとうございました。